飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

平成 30 年 11 月 30 日現在

今月の重点活動

■水稲　日本一の「美味しいお米」産地を目指して

【国際総合部門金賞受賞者】

11 月 26、27 日に高山市民文化会館で、全国最大規模の米食味コンクールである「第 20 回米・食味分析鑑定コンクール：国際大会ｉｎ飛騨」が開催された。

今回は第 20 回の節目で、岐阜県で初めて開催される記念すべき大会であり、飛騨地域（下呂市含む）からも昨年を大幅に上回る 443 点が出品され、全体の出品点数は過去最高の 5717 点を記録した。当日は最終審査が行われ、国際総合部門では飛騨地域（下呂市除く）から 11 名が最上位の金賞の栄誉に輝き、その他部門でも数多くの方が入賞した。

農業普及課は大会成功に向け、良食味米生産技術の確立に向けた各種調査、現地研修会による栽培管理指導、さらに出品の勧誘等を行った。

今後は「飛騨米」のブランド化に向け、関係機関と連携し、支援していく。

新たなブランドづくり

■イネＷＣＳ　自給飼料生産法人に対してＷＣＳ用稲の栽培・収穫技術の指導

【ＷＣＳ用稲の汎用機での収穫・調製】

11 月 8 日（木）に高山市に於いて、農業普及課、農業振興課、畜産協会と連携して農業法人に対してイネＷＣＳの栽培方法と収穫調製技術について指導した。

飛騨地域では酪農家や黒毛和種繁殖農家と自給飼料生産法人が耕畜連携し、ＷＣＳの栽培調製及び給与を推進している。

農業法人は、今年度、トウモロコシやソルガムなどの飼料作物もＷＣＳ用稲も収穫・調製できる汎用機を導入し、水田等フル活用を実践している。

生産者が専用品種の特徴を生かしたＷＣＳ品質向上を実践できるよう革新支援専門員は関係機関と連携し支援する。

多様な担い手づくり

■担い手　新規就農者の初期経営をサポート！～青年等就農資金の借入個別面談～

【面談の様子】

11 月 15 日(木)に、青年等就農資金を活用した経営指導を実施するために、個別面談を開催した。

青年等就農資金は、新規就農者の初期経営の安定化や規模拡大を促すことを目的に(株)日本政策金融公庫が融資する資金で、当所管内でも毎年多くの新規就農者が活用をしている。

当日は、次年度就農予定の４名の面談を実施し、就農動機や資金の借入目的について、就農者自身から公庫及び岐阜県信連に対して、説明がなされた。

農業普及課では、借入申請に向けた申請書の作成支援や、公庫と就農者の連携支援を通じて、新規就農者のスムーズな就農を支援していく。

■担い手　第６回吉城・高原地区夏秋トマト新規就農者勉強会を開催

【勉強会の様子】

農業普及課では、吉城・高原地区で夏秋トマトの栽培経験が５年以下の新規就農者を対象に、ＪＡひだ地域トマト研修所において11月13日（火）に勉強会を開催した。

勉強会では、夏秋トマトのシーズンも終盤を迎え、収穫を終えたハウスを利用して、根の張り方（根域調査）とコルキルート、青枯れ病、線虫被害等の根の状態を細かく観察する方法と診断の仕方について能力を高めた。

出席者は、先輩トマト生産者や営農指導員、関係機関から根の状態から見た肥培管理の重要性について講義を受け学んだ。また、新規就農者同士で今作の成果を発表しあい、来年に向けてのヤル気を高めることができた。

平成30年度は、計６回の勉強会を開催してきたが、出席した新規就農者の単収は、7.2～11.8t/10aと、気象条件の悪い中で高い成果を上げることができ、勉強会が有効であったと考えている。

今後もトマト研修所、ＪＡ等関係機関と連携しながら、新規就農者の夏秋トマト栽培技術向上に向けた指導と、産地の活性化を図る計画である。

■担い手　ＪＡひだアグリイノベーションで担い手育成・就農相談コーナーが人気！！

【来場者に支援制度を説明】

11月10、11日に開催されたＪＡひだアグリイノベーションにおいて、飛騨地域新規就農支援協議会及び飛騨地域再生協議会（人・農地プロジェクト）主催で「担い手育成・就農相談コーナー」を設置した。初日に24名、２日目に13名の相談者があり、就農希望の内容を聞き取り支援制度等のパンフレットや資料を活用して、就農前の準備や就農後の経営の在り方等を指導助言した。

３回目であり長期研修生の飛騨就農支援塾とも兼ねていたため相談者は多く、後継者を持つ農家及び新規参入者の就農相談出先窓口として、次年度以降も継続する計画である。

■飛騨牛　**青年のつどいに於いて飛騨牛のおいしさの講演**

11 月 27 日（火）にひだホテルプラザに於いて、岐阜県肉用牛協会第 17 回青年のつどいが開催された。県内の若手肉用牛生産者ら 73 名が出席した。

今回は「飛騨牛について食べて語って知ろう」をテーマに、初めて牛肉の食べ比べが実施された。

革新支援専門員は、「飛騨牛のおいしさ」と題して、飛騨牛の生産基盤、牛肉消費のトレンド、香り・食感・味などおいしさの要因と成分について講演を行った。その後、講演内容に基づき食肉格付等級の異なる飛騨牛３種類を喫食し、香り・食感・味について評価した。

【青年のつどいに於いて飛騨牛のおいしさ講演】

つづいて、参加者はグループ討論を行い、今回の研修会を通じて今後の飛騨牛ブランド振興に於いて、おいしさも重要であることを認識できた。

売れるブランドづくり

■ヤマブドウ　**在来系統の探索と栽培化**

白川村では、有志が特産品づくりを目指してヤマブドウの栽培に取り組んでいる。春以降に、メンバーの所有する山林にて在来系統を探索し、有望なヤマブドウ樹を発見してきた。

紅葉シーズンも終わり、移植適期になったため、山林から樹を掘り起し、畑への移植を実施した。

以前から、ヤマブドウの増殖を実施しており、来年度には、果実の収穫が始まる見込みである。

農業普及課では、今後も引き続き、栽培技術に関する指導を行い、ヤマブドウの産地化に向けた支援を実施する。

【ヤマブドウ探索の様子】

■水稲　**美味しい米づくりに向けて水田土壌を分析**

飛騨地域では、美味しい米づくりへの取り組みを進めており、米の食味ランキングで「コシヒカリ」が４年連続で「特Ａ」を獲得し、地元で開催された第 20 回米・食味分析鑑定コンクール:国際大会では多数の入賞者を輩出するなど着実にその成果が現れている。

農業普及課では、美味しい米づくりへの取り組みを産地全体に広げるため、農業技術センター及び中山間農業研究所と協力して管内の水田土壌を分析し、より美味しい「コシヒカリ」が栽培できるよう施肥体系の見直しを図ることにした。11 月 9 日（金）、農業技術センター及び中山間農業研究所の研究員とともに管内の主要な「コシヒカリ」栽培ほ場を巡回し、分析に必要な土壌を採取した。採取した土壌は、「地力」の目安となる可給態窒素などの分析を行い、地域やほ場ごとに最適な施肥ができるようにするための基礎資料として活用する。

【研究員の指導により採取の方法を確認】

■GAP　**県 GAP 制度の確認審査に向けた現地指導**

飛騨地域では生産者の岐阜県 GAP の導入を進めており、これまでに１戸の生産者が岐阜県 GAP 確認制度の確認を受けている。

岐阜県 GAP 確認制度の確認を目指す生産者は着実に増加しており、平成 30 年度第３回目のほ場審査に向け、３戸（ﾄﾏﾄ２、ﾒﾛﾝ１）の生産者を対象に普及指導員が改善に向けた助言を行っている。

【現地指導の様子】

取り組む生産者は、今後の販売情勢への対応のみならず、自社の経営管理、労務管理にも役立てようといった意気込みがうかがえた。

農業普及課ではGAP導入推進による生産者の経営改善に向けた支援を引き続き行っていく。

■夏秋トマト　**高山トマト部会グループリーダー反省会実施**

高山蔬菜出荷組合のトマト部会では、グループ課題の研究成果検討会を 11 月 26 日（月）に行った。

部会員全員を５グループに分け、各グループの試験や視察研修結果の報告が行われ、台木品種や育苗培土、穂木品種の特性など詳細な結果については飛騨農協営農指導員とともにスライドにて紹介した。

【反省会の様子】

グループリーダーからは「他のグループの研究内容も相互に知りたい」や「来年はさらに課題解決に向けて研究を進めたい」など積極的な意見が聞かれた。

今後は全体の反省会で情報提供を行うとともに、次年度へ向けた研究課題の検討を進めていく。

■宿儺かぼちゃ　**中日農業賞現地審査が行われる**

飛騨地域の特産品である宿儺かぼちゃの生産者で組織される「宿儺かぼちゃ研究会」が第 78 回中日農業賞における岐阜県の候補者となり、11 月 14 日（水）に現地審査が行われた。中日農業賞とは、中部９県の農業者やその団体を表彰する中日新聞社主催の顕彰事業である。

高山市役所丹生川支所内で行われた室内検討では、宿儺かぼちゃ研究会員、高山市役所及び農業普及課から、研究会の設立経緯、活動内容、ブランド化への取組について説明を行い、その後審査員との間で活発な質疑応答が行われた。

【審査員らによる現地視察の様子】

室内検討後に丹生川町呂瀬の圃場審査会最優秀賞ほ場において現地視察が行われた。来年３月に各賞が決定される。

農業普及課では、今後も安定生産、品質向上等に向けた宿儺かぼちゃ研究会の取り組みを支援する。

■飛騨ねぎ　**飛騨ねぎ品評会を開催！**

飛騨地方の特産物である「飛騨一本ねぎ」の今年の出来映えを競う品評会が１１月１５日に開催された。１０点が出品され、太さ及び長さの揃い、白い部分の長さ、病害虫の有無などを農業普及課、ＪＡ支店長ら４名が審査した。審査員の合議により、上位３点を賞の対象とした。

審査講評では、「大雨、台風により平年比では不作であるが、出品物は良いもの揃いで生産者の技術の高さがうかがえた」と加留農業普及課長がコメントした。

【審査の様子】

また、夏期に幼虫の食害が著しい圃場があったネギハモグリバエ等の病害虫について、今後の対策も含め担当普及指導員が説明した。

農業普及課では、今後も安定生産、品質向上等に向けた飛騨ねぎ研究会の取り組みを支援する。

■ほうれんそう　**他産地との交流**

11 月１日（木）、２日（金）にかけて、広島県のほうれんそう生産者・関係者 35 名が来訪し、高山の若手生産者・ＪＡひだ・農業普及課で出迎えた。ＪＡ集荷場、ほうれんそう調整作業場を視察し、意見交換の場も設けた。広島県からの参加者は若い生産者が目立ち、高山の若手とも意気投合し、大いに盛り上がる結果となった。

担い手・労力不足による生産量減少が課題となる中、他産地との連携により、ほうれんそうの売り場を守っていくことも将来的に必要になるのではないかと考えられた。

【ＪＡ集荷場案内の様子】

■ほうれんそう　**県ほうれんそう部会中央研修会における取組報告**

11 月 27 日（火）、岐阜市にて県ほうれんそう部会中央研修会が開催され、農業普及課の取り組みについて報告した。内容は重要害虫ホウレンソウケナガコナダニの防除技術に関することで、昨年登録拡大された殺虫粒剤をほうれんそうの播種時に使うことで、被害を大幅に軽減できる旨を報告した。

研修会では収穫機（根切り機）の現地実演や、講演として消費税アップに伴う軽減税率制度の説明や、べと病耐病性品種の育種状況に関する情報提供が行われた。

【普及課報告の様子】